



紹介者

福田 修二

太平洋セメント
取締役会長



網谷 勝彦

日本コンクリート工業
取締役会長

オリンピックを前にしての雑感

戦中生まれの私にとっては、2回目の東京オリンピックを迎える。

2020年東京オリンピック・パラリンピックも、いよいよ開幕まで1年を切るところとなり、日本選手の活躍が期待される競技や代表選手の話が最近のネットや新聞紙上ににぎわっている。50年前の時には、陸上男子100m、男子バスケットボール、女子テニスなどは、メダルどころか出場枠さえ危ぶまれた種目で、様変わりである。

様変わりを生み出した新しい日本選手像がある。活躍が期待されている男子100mのサニブラウン ハキーム選手やケンブリッジ飛鳥、男子バスケットボールの八村塁選手、女子テニスの大坂なおみ選手たちである。彼ら彼女らのインタビューを見るたびに、日本国を代表するのだから日本国民であり、日本の法や制度を共有し、日本という国家に所属していることに間違いのないと思うが、日本人(日本民族)と呼ぶには違和感を覚えるのは、私だけだろうか。

この50年で日本というより世界でグローバル化が着実に進展してきたことだ。島国日本でも混血の歴史だそうだ。平成13年に平成天皇が記者会見で「桓武天皇^{かんむ}の生母が百済の武寧王^{ぶねい}の子孫であると続日本記に記されていることに韓国とのゆかりを感じています」と述べられている。660年、百済が唐に滅ぼされた時、百済の難民を大量に受け入れ、数百万人の人口増大をもたらし、渡来人と日本人の間で混血が進んだそうだ。韓国でもこの1,500年で中国人、満州人、モンゴル人との混血が急速に進んでいるという。中国の歴史は、南北朝を見るまでもなく、統一王朝の多くは異民族王朝で漢人が立てた王朝は、始皇帝の秦、漢、晋、明の四つだけ、モンゴル人、チベット人、トルコ人と漢人とのハイブリッド(混合)が中国である(古今東西、民族間の混血がなかった民族などどこにもないそうです)。

東アジア経済圏が、世界経済のエンジン役を果たす時代を迎えている。経済圏とは人の交流が根底にある。ハイブリッド型の企業、産業、市場が急発展しており、日本人の混血はさらに進化していくのでしょう。

▶▶ 次回リレートーク

江川 健太郎

日本電設工業
取締役会長